

## 古絵葉書で見る金沢城・百間堀

塩谷 忠士

### 一、はじめに

兼六園下から広坂まで通るお堀通りは、金沢城を囲むように巡る堀の中では最も大きかった「百間堀」を埋め立てて作られました。百間堀の長さは石川門前土橋（通称、石川橋）から車橋まで、百五十間（約二七〇m）ありました。明治四十三年から四十（一九一一年）にかけて行われた埋め立て道路工事によって現在に近い姿に変貌し、満々と水を湛えた様子は今となつては想像することが難しい状況です。

まだ金沢城本丸に金沢御坊があつた時代、湧き水の溜まる天然の谷で「蓮地」と呼ばれていました。天正期になると小立野方面からの防御を高めるために、谷筋を利用して掘られて空濠となり、寛永九（一六三二）年の辰巳用水の城内への導水によって水堀化されました。

手元に最近入手した百間堀の様子がわかる古絵葉書が三枚あります。二枚は水堀だった明治時代のもの、もう一枚は道路開通後の大正時代のものです。これらの絵葉書から近代以降の百間堀の変化を考えてみます。

## 古絵葉書 1、金澤城



軍隊駐屯の明治 42 年以前の水堀であった時のもの

## 写真 1、2012 年 2 月撮影



兼六園桂坂口からお堀通りの中間に通じる道路下で撮影する。  
当時はもっと高い位置から撮影されたようです。

## 古絵葉書 2、金澤城



軍隊駐屯の明治 42 年以前の水堀であった時のもの

## 写真 2、2012 年 2 月撮影



兼六園桂坂口からお堀通りの中間へ下る道路途中で撮影する。  
撮影位置はここより前方だと考えられます。

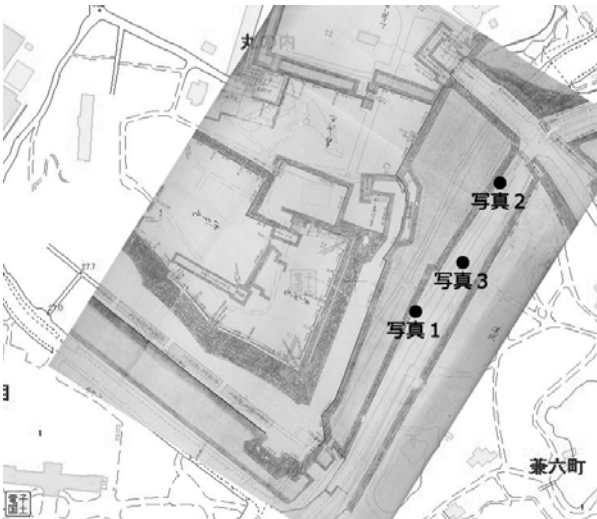
## 二、明治時代の百間堀

藩政期の絵図をみると百間堀は石垣に囲まれています。水堀だった時代の絵葉書は二枚とも兼六園側の石垣上から撮影されていると思われます。しかし、兼六園側の石垣は道路工事により大部分が外されて、裏の土塁も大きく削られてしまいました。

現代地図に藩政期の絵図を重ねてみると(図一)、絵図は正確な測量に基づくものではないものの、百間堀の兼六園側石垣のラインはお堀通りの東側歩道の上に来るようです。

古絵葉書1の兼六園側石垣の手前(南側)の直線箇所は、金沢城側と同じ高さになっていますが、奥(北側)は一段折れがあつて見えません。しかし、古絵葉書2で左方向(南側)に緩やかに傾斜している様子がみられ、一段折れのある中間箇所に向けて緩やかに傾斜していくものと考えられます。

図一、百間堀の範囲比定と撮影場所



国土地理院の電子国土 Web システムから提供された地図データに、「金沢市史 資料編 18」の別刷 13「金沢城絵図 石川県立歴史博物館蔵」を重ねて加筆・作成しました。

### 古絵葉書 3、金澤城石川門



明治 44 年のお堀通り開通後から大正 8 年の兼六園下・香林坊間の市電開通までに撮影されたもの

### 写真 3



蓮池門通りの兼六園蓮池門口近くから撮影する。松や桜の木など植生がかなり変わっています。

### 三、大正時代前期の百間堀

古絵葉書3はお堀通りが完成してはいますが、市電の軌道が見えないので、その間約十年（明治四十四年〜大正八年）の百間堀の様子となります。蓮池門通りやお堀通りへ下る道路は現在と変わらず、この頃には兼六園側の道路の形はほぼ完成し、現在まで引き継がれているようです。

### 四、おわりに

今回、古い絵葉書を手に入れたことを契機に、約百年前の百間堀を考えてみました。詳細な資料調査をする時間的余裕もなかったため、裏付けのない思い込みになっている部分もあると思いますが、数枚の絵葉書から自分の生まれるずっと以前の様子を知られることは、とても有意義な時間でした。金沢は名所が多く、全国的にみても多くの絵葉書が発行されているようです。これからも珍しい絵葉書との出会いを楽しみにしています。

### 参考資料

「金沢城跡 車橋門 発掘調査報告書」平成八年 石川県立埋蔵文化財センター・編  
「金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ」

平成十年 石川県立埋蔵文化財センター・編